

# 「夕焼け〜Growing Age〜」

2016年6月

## 映画甲子園競作部門参加用シナリオ

※このシナリオは、映画甲子園・競作部門の規定テーマ「成長」に合わせ、主催者が用意したモデルシナリオです。  
時間が十分に確保できなかったり、アイデアが浮かばない場合の参考にしたたり、敲き台として使って頂くためのシナリオです。  
そのため、演出に関する指示は必要最小限にしてありますので、必要に応じて指示を書き入れてください。  
また、登場人物たちの設定は、共学校に通う高校3年生にしてあります。タイトルや人物名を含め、様々な設定を自由に変更して頂いて構いません。

※このシナリオは、株式会社 deerstudio が無償で供与して下さっている「脚本用 Microsoft Word テンプレート・サンプル」を活用しています。

使用方法については、<http://deerstudio.jp/inc/downloads/film-and-video/script-microsoft-word-template.html> を参照ください。

作者名：斯波和泉

映画甲子園実行委員会

東京都新宿区早稲田町85番地5階  
電話番号03(6457)6210  
電子メールアドレス：eiga@smn.or.jp



「夕焼け〜Growing Age〜」・登場人物表

大空歩人 (おおぞら あゆむ)	17)
都筑京香 (つづき きょうか)	18)
北原 渉 (きたはら わたる)	17)
井伏正有 (いぶせ まさあり)	18)
氏家 卿 (うじい えあきら)	18)
左近雅彦 (さこん まさひこ)	18)
北原綾乃 (きたはら あやの)	17)
松平康信 (まつだいら やすのぶ)	17)
山岡真珠 (やまおか まじゆ)	17)
小森未来 (こもり みく)	18)
浜本亜弓 (はまもと あゆみ)	17)

その他、クラスメート

映画部長。三谷幸喜が大好きで劇演出もしてみたいと願っている。あだ名は「ルーク」だが、京香は「プーちゃん」と呼ぶ。歩人の幼馴染、学級委員長で女バス主将。姉御肌の元気女子。あだ名は「委員長」だが、歩人は「京平」と呼ぶ。歩人の大親友。映画部。トレカが得意。音楽に造詣が深く、編集技術に秀でている。あだ名は「ワタル」

合唱部長。歩人の親友、兄貴的存在で説教癖有り。あだ名は「マスジ」

子供っぽい歩人をからかうのが趣味。あだ名は「ウジケ」だが、歩人は、名前にもちなんで「ベイダー(卿)」と呼んでいる

剣道部主将。都大会1位、全国でも屈指の実力派。成績優秀、イケメンという3拍子そろった同級生。あだ名は「大将」

生物部長のクラスメート、おしとやかで優しい女子。秘かに憧れている男子多数。涉とは「はとこ」の関係

超が付くほどの生真面目な性格の優等生。頭髪は7・3分け。字が上手なクラス委員。あだ名は「殿」

帰国子女のクラスメート。大人っぽい雰囲気です。少し近寄り難い。両親が海外赴任中で祖母と弟と暮らしている

真珠の親友。複雑な家庭の事情と真珠の両親から頼まれたこともあって、山岡家に寄宿している

京香の親友。女バスのエース。あだ名は「あゆ」

ガヤガヤと騒がしい教室。

教卓に両手をついている女子、都筑京香（18）

学級委員長。京香の左後ろには板書する松平康信

（17）、学級委員。

「議題

今年の文化祭の出し物について」と書いている。

都筑京香（18）「静かに！ シッ・ズッ・カーツ・ニイーツ！」

おしゃべりが少なくなり、前方に注目し始める生徒達。

机に腰掛け足を座席に乗せて、後ろの席の男子と話している男子生徒が声を上げる。

男子生徒A 「殿オ、議題、書けたかー？」

男子生徒B 「今、『祭』を書いてるよ」

男子生徒A 「アザッス！」

机から降り、前を向いて座る男子生徒A。

京香 「ご協力感謝！」

さて、皆の衆、中間、ご苦労さまでした」

教室のあちこちから（主に男子生徒たちが）「ご愁傷様」とか「イエイッ！」とか「オウ！」などなど適当な返事を返している。

京香、まじめな面持ちになって語り始める。

京香 「1年生の時、初めて臨んだ文化祭に『ガラス細工の青春』で2位になったアタシ達。

大賞を期待し、されていた去年は人形劇で5位。ぎりぎりの入賞。

・・・、くやしかった。

っていうか、『屈辱？』だった・・・」

うつむく京香。

同じように下を向く生徒達。しんとする教室。

京香

「雪辱を誓った去年の9月6日、忘れてないよネ？」

京香の問いかけに「覚えてる」「忘れてないぞ」

などと答える生徒たちの声、声、声。

誰かが「リベンジ、リベンジ！」と声を上げると

クラス中で「リッペンジ、リッペンジ」の大合唱、

手拍子をとる生徒もいる。

京香

「そう、それよ、それ！『リベンジ！』」

サウンズ、グーッ！

1年生で3イベント全て2位という史上初の快挙を成し遂

げたアタシ達。去年は、文化祭大賞さえ取れば、史上2

クラス目のグラندスラムだったのに……。

まさかの5位。5位だよ、5位！許せる？」

生徒たち「許せない！」「ムリ、ムリ」などと

口々に応える。

京香

「今年は受験を控えたアタシ達だけど、

やっぱ、リベンジすべきだよネ？」

あちこちから「その通りだぁ！」「やるぞぉ！」

という同意の声上がる。

京香

「富田先生は、『受験を考えると素直には喜べない』って

言ってたけれど、今年も体育祭は獲った！

音楽の森谷先生は、『今年も、対抗なし、穴なし、34R

(さんじゅうよんるーむ)で決まりだな』と言っているか

ら、合唱祭も連覇は確実。

問題は文化祭よね？違う？」

一同、うなづく。

「やっぱ、欲しいよネ？」

一同、大きくうなづく。

京香

「アタシ達が獲りたいタイトルは？」

と言って、左耳に手を当て、皆に向かって上半身

をひねり、少し身を乗り出す。

一同

「文化祭大賞くっくっ！」

2. 映画部室 … 放課後

大空歩人（17）、ノートPCを操作している。向かい側には北原渉（17）が、トレカのカードをシャッフルしたり、机の上に広げたり、手持無沙汰な様子。おもむろに手を止め、少し心配そうな声で

北原 渉（17） 「ルーク、安請け合いしちゃったけど、大丈夫かよ？」

大空歩人（17） 「う・んっ？」

少し怪訝そうな顔で渉の方に注意を向ける。

渉 「映画甲子園だよ！今年こそ『特選』獲るんだろ？」

歩人 「ああ、それはね・・・、狙うよオ、当然」

渉 「だったら・・・」

歩人の答え方に絶句気味になる渉。

歩人 「大丈夫だよ、ワタル。」

ほら？ 去年作ったじゃん、演劇台本。女子に押し切られてお蔵入りさせたやつ。」

渉 「あぁっ！あれかっ！」

思い出し、ニヤリとする渉を見て、こちらも意味ありげにニンマリとする歩人。

歩人 「そう、あれ。」

そう言いながら、カチャカチャとキーボードを素早く叩き、最後に勢いをつけてエンターを押す。

歩人 「できた！」

3. 体育館 … 夕方

キュッ、キュッというシューズの音を響かせて女子バスケット部が練習している。

4  
体育館脇 … 夕方

開け放たれた扉の外からコート覗く歩人。京香を探している。手にはプリントアウトした台本を軽く丸めて持っている。  
扉に背を向け、チームメートのシュートをガードする練習をしている京香に気づき、台本を振って合図する歩人。京香は気づかないが、向かい合っている京香の親友、浜本亜弓（17）が歩人の姿をみとめ

浜本亜弓（17）「京香、ルーク、ルーク！」

亜弓は少し顎をしゃくって、視線で合図するが、練習に集中している京香は気づかない。

京香「えっ？ルーク？」

何を言ってるんだという顔をして亜弓を見つめ、練習を中断する京香。

亜弓

「ばっか、この状況でボールの軌道の話をするかっ！  
ルークが来てる。何か振ってるヨ」

お腹に手を当て吹き出す亜弓。

つられて笑いながら、後ろを振り返り、歩人を見つけた京香。亜弓に向き直り礼を言う。

京香

「あゆ、サンキュー！」

コートを後にして歩人に駆け寄ってくる京香。  
二人の視線が合い、どちらからともなく「よォ」という感じで手を上げ合う。

歩人

「出来たよ」

目を大きく見開き、驚きを隠せず

京香

「もう？」

歩人

「うん、楽勝！」

6. 学校間近の路上 .. 朝 (7時頃)

学校近くの路上。歩人がカメラを手に、目についた物を撮影しながら歩人いている。登校時間には早く、他の生徒の姿はほとんどいない。

5. 教室 .. ロング・ホームルーム (文化祭ミーティング2回目)

T

『文化祭ミーティング2回目』

松平が板書している。

「議題

- 1 台本の検討
- 2 合唱祭に向けて、練習日程の検討
- 3 その他」と書いている。

京香が1列おきに台本を配っている。

教室はがやがやとしている。

京香

「さすがは、映画甲子園入選の実力者。  
ブーちゃん、神速だね」

京香の呼びかけに慌て、辺りを見回す歩人。

少しホっとした感じで

歩人

「ブーちゃんはやめるヨ、キョーへー (京平)」

京香

「そっちこそー！」

目を見合わせ、互いに頬を膨らませる真似をする  
すぐに表情を崩し、ほほ笑み合う。

歩人

「ギブ・ミー・ファーイブ！」

二人同時に「イエー！」と言ってハイタッチする。

京香

「ゴメン！ありがとう。嬉しい！」

喜んでいる京香に台本を手渡し、後ろ手に振りながら帰っていく歩人。

コートに戻った京香を亜弓が冷やかしている。

「いっち、にい」「いっち、に、さん、し」と掛け声を揃えてランニングする野球部、校門を出てくる。

歩人

「おっ、これも撮っとこ・・・」

野球部にカメラを向ける歩人。何名かが歩人に声を掛けたり、手を上げてあいさつして行く。

歩人もファインダーを覗きながら、空いている右手を軽く振って応答する。

歩人

「甲子園か・・・、頑張ってね」

野球部に向かってというよりは、自分に向かってつぶやく歩人。

野球部が走り去り、辺りが静かになる。

一人の女子生徒が自転車で登校してくる。かなり急いでいる様子でみるみる近づいてくる。

北原綾乃（17）だ。撮影している姿で歩人だと判断したらしく、かなり離れた所から声を上げる。

北原綾乃（17）「アユムくん！」

歩人が声の主を確かめようと視線を向けると綾乃の後方を追うように走ってきた自転車が急ブレーキをかけて止まった。

声の主も判らず、不審そうに首をかしげる歩人。

綾乃、歩人のところで自転車を降り、

「大空君、おはよ。助かったワ。

まだいる？」

綾乃

「エッ」という表情をする歩人

綾乃、親しそうな感じで歩人の肩に触れながら、

顔を寄せ、小さな声で

綾乃

「自転車の男の人。

まだ、いる？」

綾乃の態度に驚き、緊張しながら綾乃の後方を確認する歩人。

歩人

「あ、引き返すところだ」



とつぶやき、綾乃に向かって

歩人 「なんか、戻って行くよ・・・」

歩人 小声で答えた後、少し我に返り、弾かれたように  
「あっあっ、きっ、北原さん、お、おっ、おはよう」

歩人のリアクションに緊張していた表情が解け、  
ほほ笑む綾乃。

歩人は事態の把握ができず、固まったままだ。

綾乃 「良かった・・・」

とても安心した様子の綾乃。

しばらく間をおいて語り始める。

綾乃 「大空君、ごめんね。

撮影の邪魔、しちゃったね・・・」

でも、本当に助かりました。ありがとうございます」

言って、深々と頭を下げる綾乃。

歩人は少し照れたように「いやいや」と手を振る。

綾乃 「家を出てしばらくして、後ろから視線を感じて・・・」

振り向くと止まったり、曲がったりするんだけど、気が  
つくとまたつけてくる感じで・・・」

歩人 「知ってる人？」

綾乃 「ううん、もちろん知らない」

バカな質問をしたなあ、と頭をかいている歩人の

姿を可笑しそうに見ながら

綾乃 「でも、ほんと、キモかったあ・・・」

大空君が撮影していなかったら、と思うとぞっとする」

綾乃が飼育小屋の掃除や餌やりをしている。

少し離れた場所からその様子を撮影している歩人  
背後から近付く歩。少しの間黙って歩人を観察し  
ていたが、

∞ 教室… ロング・ホームルーム(文化祭ミーティング3回目)

渉 「わっぴい、寝坊した。

今、何撮ってんの？」

渉が近づいて来ていたことに全く気付いていなかった歩人。驚いて振り向く。

「お、おはよー。

百葉箱とか、飼育小屋とか、い、いろいろと……」

「北原綾乃、とか？」

からかうように言って、歩人の顔を覗き込み

「残念ですが、NGです。

綾乃ちゃんには彼氏がいます。」

抑揚のない、アナウンサーのような、商店街の案内放送のような、コンピューターの音声応答のよ  
うな言い方で伝えた後、素に戻り

「もちろん俺じゃないよ。知ってのとおり親戚同士だし」

「！、……」

一瞬、絶句する歩人。慌てて

「な、何を言ってるの、が、が、学校の日常風景を、と、撮ってる、だっ、だ、ただだよ」

そうか、そうか、というような身振りで答える渉。

T

『文化祭ミーティング3回目』

教室はしんと静まり返り、緊張感が漂っている。

コツコツという音がしている。

松平が黒板をチョークで軽く叩いている音だ。

教卓の横にイス2脚、そのひとつに京香が座っている。表情が曇っている。

「配役」と書かれた黒板。右から左に向かって、

上段に役名、役割、下段に苗字が書かれており、

「演出」の下、担当者のところ、松平が困った

ような顔をしてコツコツとさせている。

二人の男子生徒が教室の後方で立ち上がり、互いに視線は黒板の方に向けながら、熱くなって発言している。

窓前列後ろから3つ目の席に立つのは、歩人。

もう一人、廊下側最後尾の席に立っているのは、

左近雅彦（18）。

左近雅彦（18） 「映画部とか、関係ないから。

ジャンルの近いとか、ナンセンス。もっと言っちゃうと、仮に大空が演劇部だとしても関係ない！だって、クラスの問題だから」

歩人を左手で指さして熱弁をふるう左近に対し、

歩人は腕組みをして、下を向いている。

左近 「さっき委員長が『大空君が台本書いてくれたんだから、演出を任せてあげようよ』って言ったけどさ、

台本書いたやつが演出やるなんて、事前に決めてなかったし、もしそれが条件だというなら、俺、書くよ、台本」

歩人が自分に向けられたので

京香 「『条件』だなんて、そんな・・・

アタシはただ、台本を書いた人の頭の中には、誰よりも舞台の情景が浮かんでいるんだろうなって・・・」

説明する京香をさえぎって

左近 「ナーンセンセンスッ！

脚本家と演出家は、分業になっているぜ」

歩人、京香に向かっていている攻撃の矛先を自分に向けてさせるように、左近の方へ身体を向けて

歩人 「左近君さあ、

って言うか、みんな、僕の台本読んでくれたんだよね？」

何人かの生徒が黙ってうなずく。左近は身じろぎもせず、歩人に強い視線を送っている

「そしたらさ、気づいてくれたと思うんだ。

歩人

この台本が、1年の時のクラス映画の続編だったこと。

主人公の翔馬が左近君にすんなり決まったのも、そのことをみんなが・・・」

左近  
歩人の言葉を強い語調でさえぎる左近  
「だから、何だって言うんだっ！」

主役なんだから、演出は、ゆるい映画しか作れないお前に任せろって言うのかっ！」

涉  
歩人を侮辱する発言、歩人より先に涉が反応する。  
「あやまれ！」

左近、謝れ！  
大空に、あや・・・」

涉の3度目の「謝れ」という言葉を遮って歩人のもう一人の親友、井伏正有（18）がバリトンの説得力のある声で、静かに語りだす。

井伏正有（18）  
「みんな、聞いて。  
うちのクラスはさ、たぶん、この学校で1番まとまりの良いクラスだと思っんだ。」

そう言って、一旦話しを区切り、クラスを見回す  
井伏。

黒板前に立っていた松平、空いているイスに座る。  
「うちらはさ、だから、体育祭でも合唱祭でもタイトルを取ってきたし、球技大会、武道大会、水泳大会、駅伝競走、みんなで力を合わせて勝って来たじゃない。」

下を向いたままだった京香が顔を上げ、井伏を見つめる。

大勢の生徒がうなずいている。教室から緊張感が解け始める。ゆっくりと語る井伏。

井伏  
「うちらはさ、3年生になったし、  
7月10日は参院選があるし・・・、  
アッ、これは関係ないか？」

失笑が漏れる。誰かが「選挙権ないし」と反応し、  
「俺も」「私も」と何名かが呼応すると、笑いが

クラスに広がる。井伏は面目なさそうに頭をかいている。教室が和やかなムードになる。

立ったままだった歩人が席につく。

「ごめん、ごめん。」

話しを戻してっと。

そのうちらがさ、委員長のアジに乗っかって、夏期講習とか、忙しい夏をさらに忙しい夏にして、文化祭大賞を狙おう。って言うか、ゼッタイ獲るぞォ！って盛り上がって。で、今日が3回目の対策会議な訳で」

井伏、そう言って左近に視線を向け、ほほ笑みかける。

左近、ゆっくりと腰をおろす。

「左近君さ、僕は君がこんなに演劇に詳しくて、情熱を持っていたなんて知らなかったヨ。

正直、感心してる。すごいなあって思う。

ただ、ルークのことをバカにした発言は如何なものかと思う。その点は反省してほしいと思うんだ。」

そう言うてにっこり笑う井伏。左近は下を向く。

井伏、視線を左近からはずし、クラスを見回すようにして

「どうだろう、みんな。」

今度の劇の演出、左近君にお願いしてみようよ。

ル、…、大空君が相応しくないとか、演劇に関する造詣が深いとか浅いとか、二人を比較して言うんじゃないって、左近君の情熱の深さが、嫌になるほど伝わったし、それなら任せて・・・」

井伏の発言に堪え切れずに席を立つ歩人。

「もともと爺臭かったけど、先に18歳になって、大人の仲間入りをしたかどうか、知らないけど・・・、何だよ、偉そうに！

したり顔でこの場を丸く収めようとしちゃって・・・」

「いや、別に丸く収めようとなんて・・・」

井伏

歩人

井伏

井伏

井伏

歩人

歩人、バンっ！と両手で机をたたく。

「もう結構！

」高説ごもつとも。

僕は、全国大会でベスト4なんて夢のまた夢、せいぜいが入選どまりの実力しかないゆるい映画小僧ですよ。

匿名劇壇どころか、キャラメルボックスもお座敷コブラも観たことないし、っつか、知らなかったし……。

演出なんて百年早い、演劇を語る資格すらないってことがよっく解りましたっ！

左近先生、ありがとうございました！」

と言うや、バツと教室から飛び出して行く歩人。

渉、慌てて後を追いかける。

9. 廊下…授業中

早足で前に行く歩人。大きな音をたてないように気遣いながら、小走りに歩人に追いつこうとしている渉。（「ミカルな感じをお願いします」）

10. 教室…ロング・ホームルーム

松平が板書している。

「演出」の下に付いていた点々は消され、左近と書かれている。

音響・照明…北原（R）

大道具…宇多・小針・田辺

と続けて書かれている。

京香が教卓の後ろに立ち何やら説明している。

ふてくされた感じで歩人が座っている。  
渉が気遣うように話しかけている。

歩人 「イイ感じだったのに、最後に当てが外れちゃったな？」

渉 「・・・」

拳を握りしめ、地団太踏んで、悔しがる歩人

渉 「去年、伏兵のメルヘン人形劇にやられちゃったから左近との対決にならなかったけど、結果は一緒だったな、きつと・・・。」

歩人 「ベイダーから、左近が演劇オタクだって情報貰って、新感線とか、ヨーロッパ企画とか連れてってもらって・・・、何より、主演日左近をイメージして『航跡く青のリベンジく』を書いたんだけれど・・・。  
ブレイング・ディレクターとはねえ。」

言って、フツと自嘲気味に鼻で笑う歩人。

渉 「ヨシノブ巨人って感じかね。」

左近にかかっては、ウジケも時代遅れにされちゃった訳だ・・・。

で、どうすんの？ほんとにサボタージュするの？」

歩人 「サボタージュだなんて・・・」

台本書いた訳だし、僕の役割は終わってるから・・・」

渉 「おい、鳴ってるぞ、ケータイ。いいのか？」

歩人、スマホの画面を見ただけで、いいんだという風に伏せて置く。

渉 「でも、何だか寂しそうだな」

歩人 「そんなことないよ、ホラ、映画甲子園。  
今年から何考えてんだか、競作部門とかって、対戦形式にするみたいだし、カ（りき）いれないと。」

12. 屋上 … 午前中

そう言って、ガッツポーズなんだか、カゴぶを作ろうとしているんだか判然としない、情けない仕事をする歩人。  
涉、そんな歩人を見て失笑し、これなら大丈夫だろうとほっとした表情になる。

13. 映画部室 … 午前中（同時刻）

34Rの生徒たちが体育着姿で汗だくになりながら筋トレをしたり、発声練習をしたりしている。生徒たちの様子を左近が竹刀を手に見回っている。楽しそうな感じではなく、真剣さがひしひしと伝わってくる。

14. 飲食店内 … 夜（遅い時間帯）

歩人がテーブルを挟んで一人の男子と向かい合っている。氏家 卿（18）、京大理学部を目指す程

歩人が2年生、1年生の映画部員たちに指示を出している。それぞれが新作映画の台本に目をやったり、歩人の口元を見たり、書き込みを入れている生徒もいる。

映画部員A 「部長、それ、さっきも言いました」

映画部員B 「先輩、なんか疲れてないっすか？」

歩人 「……」

ラインの着信音が聞こえる。歩人はスマホを手に取りようとしてもしない。

顔を見合わせ、不審がる部員たち。



の秀才だが、素行は悪い問題児で、歩人に悪い遊びを指南する悪友だ。

氏家 卿（18） 「お前さあ、カッコ悪過ぎい！」

映画甲子園がどうかこうとか、みんなには関係ない理由持ってきて、合唱祭の練習さぼって、

まあ、矢内賞（優勝）獲ったから、それはいいんだけどお、期末終わって、劇練始まっているのに、全然顔ださないでさ。やっぱ、お前は弱虫だなあ。」

歩人 「だってさ、僕の役割は終わってんじゃない。」

下手に顔出すと、かえってみんなに迷惑かけちゃうし・・・」

すねた様子で反論する歩人に、いつになく真剣な面持ちで

氏家 「いやさ、委員長に頼まれちゃったんだよ。」

メール送っても返事来ないし、ラインしても既読にもならないってさ、困ってたぜ。

で、ウジケの言うことならルーク、聞くはずだからってさ。」

驚いて氏家を見る歩人。

歩人 「きよ、京、あ、委員長に頼まれたって？」

どうして、1年の時から犬猿の仲だったじゃん」

氏家 「あれ、お前に話してなかったっけ？」

俺さ、3年になってから第2を独（どく）から仏（ほとけ）に変えたの。思うところあって」

歩人 「え、えエ、そうなのオ？何でえ？」

だって、ベイダー卿は京大理学部志望でしょ？

お、思うところって何よ？」

氏家 「去年、お前とワタルがさ、三池崇の『風に立つライオン』観てきて、お前がさ、『三池監督、さすがだよなあ、

アフリカでロケしてきた映画で、ゾウとかキリンとか一切

出さないんだもんなあ、カッコいいよなあ』とか言ってたじゃん？」

歩人、エツという顔をする。

氏家 「あ、そういえば、さだまさしってさ、歌手だったのな、お前知ってた？」

歩人 「知ってたよ。ったり前じゃん。

ってか、おふくろがファンで、小さい時から子守歌代わりに聞かせられて育ったよ。

それより・・・」

氏家 「わりい、わりい。

でさ、親父には行ってこいってただ券貰って、でも行く気、なかったんだけどさ、お前らの話で行ってみるかって」

歩人、身を乗り出す。

氏家 「それでさ、決めたんだよ。」

歩人 「何を？」

氏家 「俺さ、兄貴が今、医大のインターンで、行く行くは親父の病院継ぐし、応用物理やりたいしで、医学部なんて行く気なかったんだけどさ、あの映画観てさ、人生観っていか、生きる目標がさ、変わっちゃった訳よ」

普段はクールで斜に構えた様な氏家が熱く語る。

そのことに驚きながら、歩人は興味を隠し切れず

歩人 「ちよ、ちよっと待ってね。

でもさ、医学部だって役に立つのドイツ語でしょ？

なのに、何でフランス語に転向したの？」

照れたように頭をかきながら

氏家 「国境なき医師団。

俺さ、医者になって、腕磨いてさ、国境なき医師団に参加したくなっちゃったんだよ、断然！」

歩人 「それで？」

氏家

「それで？って？お前ねえ、国境なき医師団はフランスに本部を置く組織なの。なことも知らないの？  
ナポレオンが頑張っちゃったから、アフリカにはフランス語を母国語にしている国がたくさんあるの！」

歩人

「ふーん、そう、なんだ。」

感心する歩人。どや顔の氏家。

氏家

「でさ、委員長はフランス語得意だし、山岡はフランスからの帰国子女だから、最近、2人を先生にしてさ、授業外でも時間のある時に教えてもらってんの。」

歩人

何しろさ、新参者だから」

「なるほど、分かった！一宿一飯の恩義ってやつね。」

それで、委員長の頼みを断れなかった、と」

氏家が大きくうなづく。

15. 教室 … 夕方

机とイスが片付けられ、広くなった教室。

34Rの生徒たちが、台本を手に立ちげいこをしている。

左近は左手に竹刀を持ち、イスを逆向きにして、背もたれに右腕を乗せ、その上に顎を置いて、上目遣いにみんなの練習姿を見ている。不機嫌そうな顔。

「すみませーん」という女子の声。

左近、ガタンと音を立ててイスから立ち上がる。

左近

「ダメダメ！何度言ったらわかるの？」

呼吸を合わせてよ、呼吸を！

一人芝居やってるんじゃないんだよ！

他の人のセリフにも目をとおして、よく聞いて！」

と言って、不満をぶつけるように、竹刀で床をたたく。

緊張して立ちすくむ役者たち。スタッフは下を向

16. 仕事の終わった後の工場（作業室） … 夜

大道具を担当する3人の男子生徒、宇多零士（17）、小針翔（17）、田辺滋（17）が製図を囲んで話し合っている。結構真剣な感じで図面を指さしたり、腕組みをして考えたり、鉛筆で書き

いている。

一人の女子が、左近の前に立つ。綾乃だ。

「竹刀で床をたたくのは、やめてください！」

私たち、あなたの劇団の劇団員ではありません！

クラスメートです！」

綾乃の言葉に怒りを爆発させる左近、綾乃に向かって

「んだとお！」

俺はなあ、みんなが文化祭大賞獲りたいって言うから

真剣に獲ろうって言うから、

こっちも本気になって、やってるんじゃないかっ！」

鬼のような形相で綾乃をにらみつける。

「にらんだって駄目、怖くなんてありません！」

決然としている綾乃。左近がひるませるかのよう  
に竹刀を振り上げようとする。

「痛い！」

竹刀が照明係の亜弓に当たってしまい、動転する

左近。謝るべきところを

「何でそんなところにいるんだ！」

と、亜弓をどなりつけてしまう。

教室から飛び出て行く亜弓。

「最っ低！」

言いおいて、綾乃が、すぐに続いて京香が亜弓の  
後を追いかけて教室を駆け出して行く。

17. 薬局 … 夜 (少し遅い時間帯)

辺みを入れたりしている様子。  
開け放たれたドアから2名の女子が入ってくる。  
製図板のライトは点いているが、工場の電気は点  
けられていないので、シルエツトになっている。  
声をかけているが、3人には聞こえていない。

山岡真珠 (17) と小森未来 (18) が連れ立っ  
て買い物をしている。リハビリパンツ (大人用の  
オムツ) を選んでいる。中の一つを手にしてレジ  
に向かう。  
店員 「いつも、たいへんね。  
おばあちゃんはどう？お変わりない？」

山岡真珠 (17) 「はい。おかげさまで」

質問に答えながら品物をレジ台に置く真珠。

店員、リハビリパンツを受け取り、袋に入れながら  
「お母さん、いつ帰ってくるんだっけ？」

真珠 「父の仕事の都合もあるので……。あと半年は……」  
店員 「そう、受験でしょ。大変だけど頑張っ  
てね。」

でも、ほんと偉いわあ。感心しちゃう！」

真珠 「ありがとうございます。  
未来、お待たせ、行こっ」

18. 飲食店内 … 夜

歩人と渉がトレカで対戦している。

渉 「夏休みって、あっといいう間に終わる感じだよね」

歩人 「うん、ま、今年は映画作りと夏期講習で、それなりに充  
実したけどね」

渉 「演出、やんなくて、良かったんじゃない？」

19. 仕事の終わった後の工場（作業場）…夕方

渉

歩人、渉の言葉に反応して眉をしかめる。  
「左近、イライラして浜本を竹刀で殴ったらしいよ。浜本泣いて教室を飛び出したって……」

歩人

「その話するの3回目。3週間も前のことだろ？  
そんなに僕に付き合おうのしんどい？」

渉

「イヤ、イヤ、イヤ」

声に合わせて、3回大きさに手をふる渉。

視線を窓の外へ向けると。大きな袋を下げて歩く真珠と未来の姿を見つける。

渉

「オっ、小森と山岡だ！ あいつら、遊んでんなあ。  
二人で暮らしてるらしいし……」

顔をしかめる渉。たしなめるように

歩人

「山岡さんの弟も一緒だし、おばあさんのお世話もしているらしいよ。」

エッ、という表情をする渉。

歩人

「あ、ベイダーから聞いたんだ。」

しみじみとした感じで

歩人

「人には、いろいろあるんだよ……」

大道具の3人が連れ立って開け放たれた扉の外に姿を現す。

宇多零士（17） 「ただいまあ」

小針翔（17） 「お邪魔します」

田辺滋（17） 「連日、申し訳ありません」

挨拶をする3人、小針と田辺は律儀に頭を下げている。洗面台で、手を洗っていた零士の父親、入口の方を向いて

宇多父（42） 「おう、お帰り、いらっしやい。

零士、言うの忘れてたんだけどなあ、何日か前、あんパンとか入ってるコンビニ袋、置いてあったから冷蔵庫に入れたぞお、まだあったから、食っちゃえよ！」

心当たりはないものの、「あんパン」という言葉に反応したのか、うれしそうに声をそろえて

3人 「はぁーい！」

20. 飲食店内 … 夜

二人の男子高校生がトレカで遊んでいる。白熱している様子。もう一人、歩人が熱心に観戦し、しきりに感心したり、我が意を得たりという風になぜいたりしている。

対戦しているのは渉と中学からの同級生、伊勢谷健嗣（17）

伊勢谷健嗣（17） 「大空がさ、トレカ上達して、激うれしいよ」

渉 「まあな、コーチがいいからね」

伊勢谷 「小学生の頃は遊戯王やってたって聞いたし、渉は関係ないんじゃない？」

渉 「なことは、ないよなルーク。」

でもよ、これでゼクス甲子園にエントリーできるな」

伊勢谷 「いや、それだけは、マジうれしい！」

歩人のスマホが鳴る。画面を確認する歩人。

歩人 「あ、ベイダーだ！」

珍しいな、なんだろ？」

慌ててスマホを操作する歩人

氏家（声） 「ボンソワ、ムシユ、オオゾラァ。」

今、話せる？」

歩人、うなずいている。氏家、まるで歩人が見えているかのように続ける。

氏家（声）

「まずは、18歳おめでとうな。都知事選にも間に合わなかったけどさ、お前も今日からは大人として扱われちゃうんだぞ、自覚をもてよ。」

などとマスジのように説教している場合ではないか！」

と、一人でポケとツッコミをしている氏家の電話

に、用もなく電話をしてくるはずがないと、身を

固くして構えている歩人

氏家（声）

「今、委員長にフランス語のレッスン受けてただけどさ、大変な事態になったぞ。」

はつきり言って、34Rの大ピンチだ！」

歩人

「どうしたの？」

氏家（声）

「委員長曰く、このピンチを救えるのは、中学時代に技術の木工で知事賞を受賞したお前さんしかいないとき。」

話がかみ合わないことにイラついたように

歩人

「だからあ、な・に・が・あった・の？」

歩人の様子にゲームを中断し、聞き耳を立てる二

人

氏家（声）

「わっつりい。柄にもなく興奮している俺がいる。」

今さ、うちの病院に小針たち3人が急患で運び込まれてきた！」

歩人

「小針たち3人って、あとの二人は？」

氏家（声）

「そっか、お前さん、左近との確執でぶんぶくれていたから、知らないのか！」

今度の劇で大道具を担当している、宇多と田辺だ！」

歩人

「・・・」

固まる歩人。

歩人のただならぬ様子に横合いから渉が尋ねる。

「もしもし、もしもし」という氏家の声が小さく聞こえている

く聞こえている

渉

「ルーク、何があった？」



21. 教室 … 朝

歩人

「ベイダーからで、大道具の3人が親父さんの病院に担ぎ込まれたって……」

「何っ!」と言って歩人からスマホをもち取る渉。

「ウジケ!? 小針たち大丈夫か?」

今から、お前んちに行く!

すぐに行く!」

慌てて、カードを片付ける伊勢谷、渉は会計伝票

と歩人の手を取ってレジに向かう。

京香

始業式後のホームルーム。教卓には担任の富田先生(47)。その左右に学級委員の二人が神妙な顔で立っている。

先生の話に続く形で

「と言う訳で、昨日、宇多君、小針君、田辺君の3人が入院してしまいました。」

3人の1日も早い回復をお祈りしましょう。

みんなは、大道具の進み具合も気にしていると思いますが、船員D役の伊勢谷君、脚本の大空君、音響・照明の北原君が引き継いでくれることになりました。」

起立する3人、任せろという感じで、胸を叩く伊

勢谷。照れたように頭をかく渉。歩人は黙って前

を向いている。

「皆さん、拍手をお願いします」

京香の呼びかけに拍手をする生徒たち。

「頼むぞ!」「お願いね」「間に合うのか?」などど声がかかる。

左近

「待て、待て。大道具なしでも成立する舞台なんて、いくつもある。今回の劇をセリフ劇にして、セットはなし。最低限の書き割りで行けるように、俺が脚本を修正するから、みんな、最後まで俺を信じてついてきてくれ!」

ざわつく生徒たち。「どう考えても無理だろ」

「セリフやっど覚えたのに」「勘弁してよ大将」  
など口々に不安な気持ちを訴える。

京香がクラスを鎮めようとしたとき、一人の男子  
生徒が立ち上がる。

左近が務める翔馬のライバル、飛馬（ひゅうま）

役を務める太宰賢人（18）だ。

太宰賢人（18）

「大将さあ、いい加減にしるよ。」

今度の舞台は、あんただけの物じゃなくて、俺たち34R  
みんなの物なんだよ。」

静かになる教室。大きくうなづく生徒もいる。

太宰

「勘違いするなよ。」

俺たちは、お前が正しいと信じてついてきた訳じゃない！  
頑張ることが、良い舞台に繋がると思ったから、頑張っ  
てきたんだ。

これ以上、お前の勝手にはさせないぜ。

お前の言葉に傷つけられた大空が、恩讐を捨てて大道具を  
担ってくれると言ってるんだ

悪いけど、俺たちは、・・・、少なくとも俺は

代役を買って出してくれた3人の頑張りにかけるよ」

京香、拍手をする。一人、二人と増えていき、全

員が大きな拍手を、太宰に送る。

太宰は、軽く会釈して、3人の代役に向けて拍手  
をする。

生徒達、「ルーク頼むぞ！」「大空君頑張ってる」

「北原ー」「伊勢谷大明神」など3人へのエール  
を送る。

ペタンと腰が抜けたように腰をおろす左近。

22. 仕事の終わった後の工場（作業場）…夜

歩人、伊勢谷、渉の3人が、必死になって、ベニヤや角柱を切ったり、ペンキを塗ったりしている。開け放たれた入口の外に2人の女子の姿が現れる。手にはコンビニの袋が入っている。

小森未来(18) 「お疲れ！差し入れだよ。一休みしてエネルギー補給しなよ！」

不愛想だが、若干照れ気味に笑顔をみせて、袋からおにぎりを出して、3人に渡す。

未来 「真珠が特性スタミナスープを作ったから、飲んだだけで。何しろ、34Rの命運は、あんたたちの腕前と体力にかかっているからね。」

真珠 「腕前は信じてるから、体力の方はサポートさせてね」  
言いながら、カップを手渡しスープを注ぐ真珠。  
必要以上に恐縮している渉を不思議そうに眺める  
伊勢谷、真珠、未来の3人。歩人は大笑いしている。

23. 講堂（体育館）舞台上 …文化祭2日目

放送部女子のアナウンス。

「第67回星ヶ丘祭、大賞は34R、出し物演劇、題名『航跡く青のリベンジ』です。34Rの皆さん、おめでとうございます。」

なお、34Rは今年度、体育祭、合唱祭に続いての最高賞受賞、本校史上2クラス目、38年ぶりの快挙となります。

会場の皆さん、34Rの皆さんに盛大な拍手をお願いします。」

会場から割れんばかりの盛大な拍手の中、京香が校長先生からA3サイズの賞状を、続いて松平が

記念盾を授与され、満面に笑みを浮かべて、高く掲げている。

24. 教室 … 午後夕方に近い

京香が廊下側最前列の宇多に賞状を渡し、後ろへ回すように促している。

松平は、窓際最前列の亜弓に記念盾を手渡し、後ろへ回すように促す。まぶしそうに盾を眺める亜弓。誰もが嬉しそうに、早く賞状や盾を手にしたいと待ち構えている様子。伊勢谷が後ろの歩人に盾を回した直後に両拳を突き上げ、バンザイと叫ぶと教室中からバンザイ、バンザイという声が沸き上がり、しばらくやまない感じ。賞状を隣の席の小針に渡し終えた左近が立ち上がって歩人のところへやってきて

「大空、あの時は悪かった。このとおり」

と言って頭を下げる。歩人は両手を胸の位置で振りながら

「いいんだよ、そんな。」

三谷喜喜みたいに、映画と舞台の監督をやってみたかったから、子供みたいにむきになっちゃって。

脚本だって、君を主役にして書けば、かなうと思って買って出た訳で・・・」

「知ってたよ」

驚いて左近を見る歩人。歩人の耳元に口を寄せて「台本、去年書いてたやつを、ちょこちょこって直しただけだったろ。お前の考え、スケスケだったぜ」

さらに驚き、顔を赤くして頭をかく歩人に、握手を求めて右手を差し出す左近。

「ありがとうな」

「にしても、蜷川幸雄ばりの厳しい演出だったってね」

左近

歩人

左近

左近

左近

歩人

25. 階段 … 午後夕方に近い

京香

握手していた右手に左手を添え合って、両手がか  
つちりと握手する二人。  
いつの間にかそばに来ていた京香がスマホで二人  
を写したあと  
「大空君、ちょっと付き合って」  
と言って、ドアへ向かう。

歩人

京香が右手で歩人の左手首を掴んで、1段抜かし  
に階段を駆け上がっていく。男子と女子だが、文  
化部の悲しさ、歩人は息が上がり始めている。  
「廊下は走っちゃいけないって、いつも自分が言ってるんじ  
ゃん！」

京香

「廊下はね！階段の昇り方に規則はないの！」

歩人

「ざっりー！なんか嘘っぽいし・・・」

京香

「急がないと見せたいものと後夜祭に間に合わないの！」

26. 屋上 … 間もなく夕方

京香

京香と歩人が屋上で向かい合って立っている。  
歩人は両ひざに手をおいて、ゼーゼー息をしてい  
る。  
優しそうな表情で歩人を見つめている京香。  
「プーちゃん、たくましくなった。」

歩人

「こ、こんな、  
か、感じ、  
なのにな？」

一言一言、息を整えながら歩人が聞く。  
京香、質問には答えず、うなずいて

京香 「18歳になったから、とか言うんじゃない、今度のことで、すごく、頼もしい人になった」

歩人 歩人、呼吸が整い、まっすぐに立ち、京香の口元を見つめる。

歩人 「屋上なんて、ひさしぶりに来たよ。

空、青いねえ、それに広い！

最近、見てなかったなあ、空。」

京香 「昔はさ、よく二人で土手に寝転んで空を眺めたね。

特に夕焼け空。帰る時間を気にしながら・・・

あ、ゾウだ！、クジラもいるーとかね。いろんな形の雲を

みつけて想像し合ってた。

ブーちゃんのお話しは、いつも面白かったな。アタシ、好きだったなあ・・・」

横に並び手すりに手をおいて空を見上げる二人。

歩人が京香に視線を戻して

歩人 「で、何？昔話をするために引っ張ってきた訳じゃないんでしょ？」

京香 「ア、ア、ア、そうだった。

閑話休題、カ・ン・ワ・キュー・ダイ」

歩人 「カンハキューダイ？何それ？」

「・・・？」

歩人 「僕が、京平のお眼鏡にかなったってこと？」

「えっ？」

歩人 「だって、『カン？は及第』って・・・」

歩人の言葉にお腹を抱えて大笑いする京香。

京香 「つまらない話はおいてって意味の4文字熟語」

歩人 「へえ、どんな字書くの？」

京香 「門構えに木と書く『かん』、ひまって意味ね。

あとは、話、休むと続いて、宿題の題」

歩人 「あー、何だ！知ってる、知ってる。」

『あだしごとは、さておいて』って訓読みするんだと思っ  
てた」

京香 「えー、そうなの？」

歩人 「小林信彦がさ、必ずその4文字の後にカッコ書きで読み  
仮名ふってるんだ。読める人が少ないからそうしてるんだ  
と思ってる」

京香 「なーんだ。現国が得意なブーちゃんにしては、おかし  
いと思った。」

「だから、脱線話は置いといて、本題、本題。本題の  
話し」

歩人 「ごめん。僕が脱線させちゃったんだった」

ペコッと頭を下げる歩人。京香はまあ、まあとい  
う感じの仕草をした後に、ましめな顔に戻って

京香 「いやいや、話っているのはさ、今度の文化祭の話し。  
ブーちゃん、すっごく立派だった。アタシらが受賞取れた  
のも、ブーちゃんのお蔭だと思ってる」

京香の言葉に照れる歩人

歩人 「そんなことないよ。拗ねてクラスの和乱して、京平から  
の連絡、無視してさ。立派などこなんて、無いよ」

京香、歩人の言葉に笑いながら

京香 「そりゃ、最初はね。アタシも『あ、悪い癖が出ちゃった  
な。ブー、ブー文句屋のブーちゃんだ！』って思った。  
電話には出ないし、家には早く帰らないし、ラインは既読  
にもしてくれないし……。確かにひどかった。」

歩人 「ごめん、ごめん。だからそれは、ベイダーのお父さんの  
病院の待合室でしっかりと反省して謝ったじゃない。  
ほんっとうにごめんなさいでした」

京香 「でもさ、その時から、小針君たち3人の代役を買って出  
てくれた時からさ、ブーちゃんは、昔みたいにアタシのヒ

ローに戻ってくれた。アタシのピンチに飛んできて、助けてくれた。

ううん。今回は34Rみんなの救世主になってくれた！あんなに嫌な思いをしたことを水に流してくれて」

頭に手をやり、身をのけぞらせて照れる歩人。

「いや、あれはね、あの時のことは全部、涉とベイダーのお蔭なんだ。

僕一人じゃ、何にも出来なかったと思う」

京香、心の底から嬉しいという表情をした後、お

どけた調子で

「うーん、いいねえ、いい！

そうやって謙遜が出来るようになったあたりも大人の男を感じるねえ……。

歩人、母さんはうれしいよお……。」

まぶたに左手を当てて、泣き真似をする京香。

「ってか、母さんじゃないし、京平だし。

茶化すなよ！」

京香、再びまじめな顔にもどって

「失礼！

今回の一件はさ、左近君、大将に非があると思う。

って言うか、当事者以外のクラス全員が、最初のやり取りの時からわかってた。

ただ、みんな大人だから、本心を引き出しにしまって、高校生活最後のイベントを大切な思い出にしようと思って、大将の暴虐を許したんだと思う。」

ここで一旦言葉を切って、歩人の顔を覗き込むようにして、にっこりと笑う京香。

歩人は笑顔を返さず、神妙な顔をしている。

「ブーちゃんは、歩人君は、良かったんだよ。あれだけ侮辱されて、傷つけられて……。

ごめんね。あの時、アタシ、何にもできなかったね……。でも、あの時、歩人君以外の誰かが、本心で大将にぶつか



っちゃったたら、多分、クラス中が堰を切ったように大将を責める言葉を口にして、クラスはバラバラになっちゃたとと思うの。」

京香、ふーっと深呼吸をして続ける。

歩人は、何かに思い当たったような表情をしている。

京香 「北原君が、歩人君の気持ちを思って『謝れ！』って大将に言ったとき、だから、井伏君が割って入って、大将に任せようって言ったの。」

歩人君なら、きっとわかってくれるからって。」

そうだったのか、と天を仰ぎ、うなる歩人。

京香は続ける。

京香 「井伏君、ほんとはすっごく辛かったと思うよ。クラスのために親友を犠牲にして……。」

アタシ、大人だなんて思ったの、井伏君。だからアタシも大人にならなきゃって……。」

でも、歩人君は、アタシのプーちゃんは、大将との恩讐を乗り越えて、すっごく頼もしい大人になって……、アタシ、ほんつとに嬉しいの」

歩人

「京平、買いかぶりだって……。」

さっき僕が大人になったって、京平、言ってくれたけれど、大人って言ったって、生まれたての大人でさ、右も左も、大人の流儀や作法なんてまるでわかっちゃいないんだ。でも、そんな僕にもわかってたよ。井伏の気持ちやベイダーや京平の気持ち。ずっとそばにいてくれてた渉の気持ちだからさ、自分の気持ち少しだけ、殺してみんなの気持ちに伝えてみようって。それが、大人だとか、そんな難しいことじゃなくて、それがみんなのためだし、自分のためなんだって。

でもね、そんな風に思えたら、逆に左近君がかわいそうになっちゃったんだ。……ただ、それだけのことなんだ」

京香

京平、歩人の言葉を感じて聞いていたが、何かを思いついたという仕草をして

「大将がかわいそうと言えば、みんな知らなかったんだけど、北原さんと大将付き合ってたんだって！」

でもね、今回の騒動の中で、大将の人間性に決定的な疑問を感じて、北原さん、大将に絶縁状叩きつけたんだって！あのおしとやかな北原さんがよ、信じられる？」

そう言って、歩人の反応を見ようとしたとき、空が茜色に染まっていることに気付いた京香、自分の方を向いていた歩人の体を半回転させて

京香

「見て見て、夕焼け！」

アタシ、この刻を待ってたの。この夕焼けを歩人君と一緒に見たいと思ってたの。」

夕焼け空をならんで眺める2人。京香の左手が歩人の右そでをつまんでいる。

M (モノローグ)

きれいな夕焼け。シルエットになった2人。京香は何やら懸命に話しているらしい様子。

京平は夕陽を指さしたり、雲の形を大きなジェスチャーで再現したり、童心に帰ったようにはしゃいでいた。

京平の手が僕の制服の袖をつまんでいたのもわかっていたけれど、その時、僕の心を支配していたのは、京平のことでも、間近に迫っている映画甲子園の応募締め切りのことでもなくて、本当に不謹慎極まりないと思うけれど、北原綾乃さんの面影だったんだ。

イギリスでは、国民の選択が国の方向性さえ変えたというのに、僕はと言えば、選択する権利を持っているという自覚すら持てずに、自分の好きな女の子のことを思っていたんだ。

---

でも、京平が見せてくれた、炎のように赤い夕陽は、僕に  
気づかせてくれたんだ。

18歳になった僕の『存在の重さ』というものを。

そして、僕の『存在の重さ』というのは、もちろん体重の  
ことではなくて、この世の、少なくとも、この国に暮らす  
全ての人々、つまりは、社会に対する責任の重さだとい  
うことを。

そのことに気付いた時、僕は、思わず心の中で叫んだんだ。

『夕焼けよ、こんな僕を焼き尽くしてくれって！』

そして、

僕はただ、変わり行く空の色を見つめ続けていたんだ。」

(終わり)